



## 援助と他者の圧力

政治行動論-11

- B. ラタネ・J. M. ダーリー 1977, 『冷淡な傍観者』  
竹村研一・杉崎和子訳 プレーン出版 1977年.



## 援助行為についての研究

### ■原題

- ・ Latane, Bibb; and Darley, John M. 1970. *The Unresponsive Bystander: Why doesn't He Help?* Englewood Cliffs: Prentice Hall.



## 援助行為が問題になる事例

- どこが問題なのか？
- ・ 都会の地下鉄で
  - ・ MDプレイヤーを大きな音でかけている若者に対して乗客が注意
  - ・ 逆に、その乗客が殴られケガをする
  - ・ 疎外・無関心？
  - ・ この部分が一番ショッキング
- その間、助けに入る乗客がいなかった。



## 非介入の原因（評論家による）

- ・ 大都会の没個人化（個人の集団からの孤立）
- ・ 無関心・疎外
- ・ 巻き込まれたくない（災害症候群）
- ・ 潜在的なサディスティックな衝動
- ・ 道徳心・規範・同情心・利他主義の衰退

●状況によって起こったり起こらなかったりということについてこれらのモデルでは予測ができない。つまり援助行為を説明したことにならない。

### ■問われなければならない質問

- 援助は何によって動機づけられるのか
- 援助するしないを決定する要因は何か



## L&Dの援助行為についての解明の手順

- ・ 人はそもそも他人を助けるのか（非緊急事態のばあい）（2章）  
→ NYの住人でさえ、他人の依頼に喜んで応えようとする姿勢をもつ（p. 22）
- ・ 「規範・道徳観」がそうさせるのか（3章）  
→ そもそもその低下が問題視されている  
→ 「規範モデル」は満足な回答ではない（p. 44）
- ・ 緊急事態と介入のプロセスの整理（4章）
- ・ 他人がいることの2つの効果（5章）
  - その実証的な検討（6-9章）
  - 自らが被害者・被害者が他人・緊急事態の原因が人にある場合
- ・ 他者がいることの第3の効果（責任分散）（10章）
  - その実証的な検討（11章）
- ・ 性格・社会的地位との関連（12章）



## この研究から学んでほしいこと

### ■方法論的

- ・ 研究のテーマの設定
  - 意外性・オリジナリティ
- ・ 状況についての理論的な分析
- ・ それをもとづいた、結果についての演繹的な推論
- ・ 実証的な確認（実験）
  - 条件をコントロールした因果関係の確認
- ← これがなくては「評論」にすぎない

### ■内容的には

- ・ 「集団の圧力」が判断・行動に影響



#### 緊急事態とは

1. 高価な対価に不当に低い報酬
  2. まれな出来事
  3. ケースごとに特殊である
  4. 突発的で早急な対処が求められる
- ・ 2, 3から前もって準備ができることではない
  - ・ 4から、人に相談する時間的余裕がない
  - ・ それでいて、得することがない (1)

つまり、介入の確率もとから低い



#### L&Dの検討：介入のモデル

- Step 1: 緊急事態への注目
- Step 2: 緊急事態発生 of 判断
- Step 3: 個人的責任の程度の判断
- Step 4: 介入様式の決定
- Step 5: 介入の実行



#### L&Dの検討：介入のパラドックス

- ・ 「人数が多ければ、誰かが助けるだろう」
- ・ じつは、他人がいることで、そして他人が多いほど、介入の各ステップで逆の効果
- ・ 見られていることの逆効果
  - 行動を抑制、気づくのが遅れる、「おせっかい」と思われたくない
- ・ 見ていることの逆効果
  - 手本を他人に求める。他人が冷静なのだから、慌てる必要なしとの判断。お互いに静観を続ける



#### ディスカッション

- ・ 電車内で老人に席を譲るかどうか
  - 「譲ろうか」と迷う
  - あまり考えずに、とっさに立つと、抵抗なく譲れる
- ・ 「席譲りゲーム」を合理的選択モデルで説明できるか
  - コスト・ベネフィットで説明がつく部分もある
  - 社会的圧力（他者の存在）の影響をどのようにモデルに組み込むか
  - 本人が気づかないうちに、他者の影響を受けているとすると本人が想定している利得行列は、実態にそぐわない可能性がある
- ・ 投票参加などの政治的な行動における他者の影響